

## メキシコ戦争と『メインの森』 ——ソローの〈市民的不服従〉の背景について

The Mexican War and *The Maine Woods*: On the Background of  
Thoreau's "Civil Disobedience"

---

山 本 洋 平

---

### 序

Henry David Thoreauはウォールデン湖畔生活中の1846年の夏、人頭税支払い拒否のかどで投獄され、出獄後の7月24日前後、「史上でメキシコ戦争ほど悪辣な罪はおそらくない」と書いている (*Journal* 2, 263)。この有名な投獄事件は、“Resistance to Civil Government” (1849) において〈市民的不服従〉の思想の素材となり、その顛末については *Walden* のなかでも詳細に述べられている (171)。<sup>1</sup> 折しも、同年の8月31日、ソローはメイン州に出かけている。この体験をもとに“Ktaadn”—インディアン語で「もっとも高い土地」(3)—を書き、ソローの死後、*The Maine Woods* (1864) の第一話として結実する。<sup>2</sup> 一箇月余りの間に、一方では政府にたいして血気盛んな抗議をし、他方では悠然と遠出の旅をするのは、29才という若さゆえにすぎないのだろうか。それとも、湖畔生活を中断してまで、この時期に旅立たねばならぬ理由があったのだろうか。

これまで、〈市民的不服従〉のソローと、メキシコ戦争へとむかう領土拡張政策下のアメリカをめぐるっては、数々の研究者たちが議論を交わしてきたが、<sup>3</sup>

投獄事件からわずか一箇月余り後に、彼がメイン州へ向かったという事実が問題視されることはなかった。確かに、一箇月という時間的な近接関係を単なる偶然と見なすこともできよう。というのも、40年代後半から *Walden* 出版の54年までの期間は、ソローの文学的成熟期にあたり、自然誌エッセイから社会批判論文まで、数々の作品が矢継ぎばやに公表されているからだ。また、『メインの森』にはメキシコ戦争批判が明示的に示されているわけではなく、「市民政府への抵抗」にもメイン州の体験が書き込まれているわけではない。

しかし、メキシコ戦争批判と“Ktaadn”には偶然以上の奇妙な符号がある。この時期、Emersonをはじめとする超越主義者たちがLyceumとよばれる講演活動を行っていたことは周知のとおりだが、ソローの講演記録を紐解くと、メキシコ戦争と“Ktaadn”との連続性がさらに鮮明になる。B. P. DeanとR. W. Hoagによる講演リストによれば、ソローは1842年から60年まで75回の講演を行っており、メイン州旅行および人頭税未払い事件から14箇月を経た1848年1月に、講演題目“An Excursion to Ktaadn”と、〈市民的不服従〉の原型たる“The Relation of the Individual to the State”が相次いで行われたとする記録が残っている (*Lectures* 1995, 152-3)。しかも、同年1月26日には“Ktaadn”と“The Relation”を同日に講演しているのである。*Walden*の生成過程を見ればわかるように、<sup>4</sup> ソローは経験したことを公表するまでに、自己内省と加筆修正を繰り返しながら、十分な執筆時間を要する作家であった。そのため、メイン州への旅行および人頭税未払い事件に直面してから公表するまで、ソローが推敲に14箇月あまりの時間を要したことは不思議ではない。しかし数ある講演のなかで、この両体験―“Ktaadn”と、メキシコ戦争下の政府批判―を同じ時期に反芻し、原稿を物し、同日に講演するという連続性に関しては、偶然というよりも何らかの必然的な企図があったと考えるほうが妥当だろう。したがって、本論では、メキシコ戦争に対するソローの態度が、『メインの森』の“Ktaadn”のなかに反映しているかどうかを検証する。「崇高」なる荒野の自然誌と見られてきた『メインの森』と、アメリカの領土拡張政策とのあいだには、どのような結節点があるのだろうか。また、その問題点を念頭に置きながら、『メインの森』で多くの議論が交わされてきた場面を中心に論じ、彼の作品を精緻に読み解いた結果として、彼の〈市民的不服従〉の思想をより深く理解することを本論のねらいとする。

## 1. “Ktaadn”の“*Contact!*” episode をめぐって

『メインの森』の第一話“Ktaadn”は、Walden以降に繋がる主題を胚胎し、その文体は荒削りゆえの魅力がある。とりわけ、批評家の間で*Contact!* episodeとして知られる場面は、ソローの書き物のなかで最も美しい場面の一つであり、読者の多様な反応を生み出してきた。この場面を分析せずに、『メインの森』を論じることはいかならない。この作品とメキシコ戦争という歴史的事象との関連に注目するのも、この*Contact!* episodeに独自の解釈を可能にすると考えられるからだ。

I stand in awe of my body, this matter to which I am bound has become so strange to me. I fear not spirits, ghosts, of which I am one, – *that* my body might, – but I fear bodies, I tremble to meet them. What is this Titan that has possession of me? Talk of mysteries! – Think of our life in nature, – daily to be shown matter, to come in contact with it, – rocks, trees, wind on our cheeks! the *solid* earth! the *actual* world! the *common sense*! *Contact! Contact! Who are we? where are we?* (71, Thoreau’s emphasis)

Ktaadn山の頂上近くの場面である。この景色の前で、ソローは「私の体を畏れて」立ち尽くしている。body (bodies) を3度、I fearを2度繰り返し、単音節の単語が並び、彼が体全体で風景に対峙している様子がわかる。その呼吸が聞えてくるような文体だ。この高揚感に満ちた文体は、Emersonの「剥き出しの地面に立ち、頭が快活な空気に洗われ」(Standing on the bare ground, – my head bathed by the blithe air)、「透明な眼球になる」という“Nature”の一節と比肩できる(11)。Robert Milderも指摘するように、ここでのソローは「まさにエマソン的“NOT ME”」の状態である(40)。さらに、「体」と自分の意志が分離していく忘我の境地は、ソローがのちにWaldenにおいて「私は他者からと同様、自己からも離れて立っている」その様子を、「たしかな二重性(a certain doubleness)」と呼んだ境地に呼応する(135)。この場面では彼は空間と精神の境界たる「肉体」に対峙して打ち震える(tremble)と書いている。

ソローの打ち震える言葉は多様な解釈を許すほど迫力に満ちているが、<sup>5</sup>しかし、その光景についてはほとんど描写されないのだ。興奮の度合いが強まる

に連れ、分節化が施されなくなり、“rocks, trees, wind on our cheeks !”と単語を並べるだけになる。どのような光景が広がっているのか、ほとんど報告されない。「私を所有しているこのタイタン (this Titan) は一体何か？」という問い、「私たちは誰なのか、私たちはどこにいるのか？」という問いで、彼は何を伝えようとするのか。

これまでの研究を振り返ると、*Contact!* episodeの解釈はおそらく対極的な二つの見かたがあり、その重心の置きかたによって多様な解釈が生み出されてきた。一つはメイン州の広大で荒々しい自然よりも、*Walden*で描かれる牧歌的な自然をよりソローは好んだとする見方であり、この場面に否定的な要素を読み込む。いま一つは、荒野に見いだした崇高性を重視する見方であり、原初の自然に直面したゆえの肯定的な高揚感を認める。

では、これまでの議論を要約してみよう。Sherman Paulによれば、「崇高性」を感じつつもソローは、あくまで「調和せず冷たく無関心な自然」について語っており、その様態は、Melvilleが描く自然の暗黒の力に準えられるべきものである。そこでPaulは、ここでのソローは自然との「親交の可能性を破棄している」と結論する (361)。たしかに、ここでの「無関心な自然は」ソローにとって、「人が住んでいる平地にいるよりも、彼には本質的な思考、正当な悟性が失われる。理性は消散し、ぼんやりし、空気のように薄く微細になる。広漠としてタイタンのようで非人間的な自然は彼を不利にし、孤独にし、神聖な機能を奪い取る」(64)。しかし、この場面*Contact!* episodeを、ソローは否定的な捉え方をしているだろうか。

一方で、この場面に自然の崇高性を読み込む評者にRonald Wesley HoagとRichard Schneiderがいる。両者とも、ソローが大学時代に書いた“Sublimity”というレポートを参照しながらこの場面を論じているが、HoagはEdmund Burkeの「恐怖は崇高の支配的な原理である」という箇所をソローが引用していることに注目している。<sup>6</sup>そして、*Contact!* episodeの場面は「自然の邪悪さへの恐怖ではなく、宇宙の原初の力への反応」であると結論している (Hoag, 35)。また、Richard SchneiderはHoagの崇高性の議論をさらに進めて、ソローの「崇高論」における「恐怖は、それが過剰な場合、(崇高の) 効果を完全に破壊する」という箇所を重視している。<sup>7</sup> Schneiderにとって、過剰な恐怖感が「徹底的に人を身体の必要性に立ちもどらせる」のが『メインの森』の自然であり、ソローは「文明と荒野の妥協」を選択したと結論するのである。(Schneider, 87)。その結論は、「(ソローは荒野よりも) 喜んで慣れ親しんだ場所 (*Walden*

湖畔)へ戻ってきた」とするHardingの読みと最終的には一致してくる(Harding, 210)。

私もまた、この*Contact!* episodeに崇高性を認めるが、Hoagのように、恐怖心のみにその崇高性を認めるわけではなく、また、Schneiderのように、肉体の酷使が崇高を奪うとは考えない。ソローが「私は肉体を畏れて立っている」というとき、その「畏怖」の念が精神的・芸術的感性を奪うとは到底考えられないからである。ソローはEdmund Burgの論を修正し、「死そのものは崇高である」と「崇高論」を締めくくっている(EE 93)。<sup>8</sup> この*Contact!* episodeのなかで、ソローは「死」の可能性を想起させるほどの光景に崇高を汲みとり、「生」なるものの不在に打ち震えているといえるのだ。Frederick Garberはこう指摘する—「Ktaadnには、ひと続きの経験に荒蕪たる間隙、亀裂が入り込んでいる、それは根源的で不和を生じさせるものであり、本能を馴致させようとして、ようやくぼつぼつと声を出し続けているだけだ」(96)。たしかに示唆に富む指摘である。しかし、この30年近く前のGarberの評言は、現代の環境文学研究者に言わせれば、そのことに何の否定的要素があるのかという反応が返ってくるだろう。Ian Marshallは、ここでの散文には「否定的な意味を含む言葉はほとんど見当たらない」し、「そのリズムは全く否定的なものではない」と指摘する(230-1)。確かに、Marshallが暗に意味するように、この議論が交わされてきた場面に、肯定・否定のどちらか決着をつける必要はない。*Contact!* episodeにおいてソローが身体で自然へ接近し、体内の鼓動と呼応させながら自然を描写している点はEcofeminismの重要な一側面となる可能性をもつ。ただしそうであったとしても、長年議論が交わされてきたこの場面を、「言葉」の指示対象を度外視して「リズム」のみで判定するのは危険だろう。

先述したように、S. Paulは、ここでのソローを意気消沈していると見ていますが、その根拠の一つとして彼は、“contact”という語が*Walden*のなかでほとんど用いられていないことを挙げている(361-2)。なるほど*Walden*において、“contact”が用いられるのはわずか3回である。そのうちの二箇所を照合してみると、彼独特の語感が見えてくる。

- (1) Contrast the physical condition of the Irish with that of the North American Indian, of the South Sea Islander, or any other savage race before it was degraded by contact with the civilized man. (“Economy,” 35 my emphasis)

(2) Whatever my own practice may be, I have no doubt that it is a part of the destiny of the human race, in its gradual improvement, to leave off eating animals, as surely as the savage tribes have left off eating each other when they came in contact with the more civilized. (“Higher Laws,” 216 my emphasis)

こうして並べてみると、まず気づくことは、“contact”が全て名詞で使われていることだ。しかも、全て“with”とともに用いられ、何かとの「接触／交渉」を表現している。<sup>9</sup> (1) は、ソローの住居論の一部である。その眼目は、家を体に喩えながら、健康な体と簡素な家に価値を置き、外界との通気性に価値を置くという点である。この引用文でソローは、「アイルランド人」よりも「北米インディアン」の強靱な肉体を示唆するが、しかし、たとえ「未開人」であっても、「文明化した人間」と「接触」すると自然環境に対応できなくなると言う。(2) も同様に、「文明化したもの」との「接触」について述べている。たしかに、「未開の部族が、文明化したものに接触するようになると、共食いを止める」という、文明開花を容認する(2)の発言と、(1)での言明とでは矛盾があり、したがって、この“contact”のニュアンスを善悪どちらに捉えるかを断言することはできない。しかし、より重要なことは、未開人にとっての異文化／文明化社会との「接触」を示すときに、“contact”という語が用いられているという事実のほうである。

『メインの森』のソローは、北米人にとっての異文化、インディアン文明ともいべき土地に「接触」した。“Ktaadn”で描かれるインディアンは、『メインの森』第二話・三話と比べると、存在感が希薄であり、先入観に満ちている。その先入観とは、インディアンを自然物のように扱っている点である。ソローにとって、この時点でのインディアンは自然児であり、異文化に属する象徴的な存在である。<sup>10</sup> では、なぜソローはWalden湖畔の自然に留まらず、馴致することのない他者の自然を求めたのだろうか。また、これまでのところ、Contact! episodeをはじめとする『メインの森』の記述にアメリカの拡張主義を読み込む評者はいない。この場面の自然描写には政治的・歴史的な記述は一切なく、ソローの〈市民的不服従〉との連関を指摘するには根拠がなさすぎる。

これらの問いを考えるべく、Contact! episodeの場面に逢着するまでの路程と、“Ktaadn”執筆前後の歴史的背景との、両コンテクストを見ていかなければならない。

## 2. “the true source of evil” をめぐって

国民の関心が西の国境線へ向かうなか、ソローは西に背を向け東海岸へと向かう。「野生の、誰も住んでいない地域が、延々と広がっている。この方向へ歩けば、ほんの数時間の旅で、西に何千マイル行くよりも興味深い原初の森の縁へその関心がむかうだろう」(4)。多数派が西へ向かうなら自分は東へ行くというような、ソローの皮肉にみちた気質はいったいどこから来るのだろうか。

1846年8月31日、ソローは親戚(George Thatcher)をたよってBangorへ向かい、登山を開始する。Ktaadn山への路程は「春の増水のせいで修理工事して」いたが、喜々として遠回りの道を選ぶ。そのほうが「荒野」や「壮麗な川や湖の景色」みるのに都合がいいからだ(3)。あたかもそれが通いながれた道かのように、距離や川の名前、気候の変化などを詳細に描いているのにも驚きだが、その履歴まで調べてきているのはさらなる驚嘆に値する。「Ktaadnに初めて白人がKtaadn登山をしたのは1804年である。West PointのBailey教授が1836年に訪問し、州の地質学者Charles T. Jackson教授が1837年に訪れ、1845年にはBostonから二人の若者が訪れている」(3-4)。このように履歴を振り返るのは、ソローの前人未到の土地を志向する精神性を表している。

ソローが少数派を自認しているのは、「市民政府への抵抗」を読めば明らかである—「あなたがたの投票権を投ぜよ、紙切れではなく全ての影響力を投ぜよ。少数派は、多数派に従っている限り無力だ。」こう述べて、ソローは税金支払い拒否をはじめとする不服従の理論を展開する(76)。急進主義的にも響くこの主張は、あくまで、マサチューセッツ州批判をするためであり、ソローは、自分を投獄した政府にたいして彼独自の言い回しでこう批判する—「逃亡奴隷、仮釈放のメキシコ人囚人、民族への不当行為に抗議に来たインディアンたちが、自由で志操のある人々に出会えるとすれば、そうした場所なのだ」(76)。「そうした場所」とは、監獄のなかのことであり、「自由で志操のある人々」とは、ソロー自身を指し示す。<sup>11</sup> ソローは「逃亡奴隷、メキシコ人、インディアン」たちを擁護するために、言い換えれば、領土拡張政策に抗議するために、少数派が多数派に打ち勝つ力学を追究したのである。

したがって、ソローがメインの森へと向かうのは少数派を代表する行動の一環と考えることが可能だろう。だが実際彼が「原初の森」の先、メイン州の森林部入り口で目にするのは、皮肉にも「ニューイングランド摩擦マッチ会社」が散らかした木片であり、「絶滅のインディアンの歴史」というに相応しく荒

廃したインディアン村の光景であり、「選挙の行方を案じる」政治談義なのである。ソローは、地図と実際の地形を見比べて、修正しながら歩くのだが、その政治談義は「地図には載っていなかった」と皮肉を込めて書いている。ソローは「携帯用の地図を持っていなかった」ので、現地に掛かっていた地図を模写するが、「後になって間違いだった」と驚嘆する（5-8）。

地勢だけでなく、彼は地名にかんしても信念をもっており、それは地勢に基づくか、土着のものであるべきだとする。その確かな証拠が彼がインディアンに地名の由来を聴取して作成した“Appendix”／インディアン語対照表なのである。さらにソローの地名のこだわりについて例を挙げれば、“Walden”という地名についてもそうである。Waldenのなかで、ソローはその由来について二つの説を提示している。一つはWaldenという名のインディアン女性（squaw）に由来するという土着の逸話であり（182）、もう一つはソロー自家製の駄洒落、「壁に囲まれている（walled-in）」（183）という地勢に基づく命名である。ところが、『メインの森』では、ソローの信念にそぐわない地名を次々に目にする。

This, like most of the localities bearing names on this road, was a place to name, which, in the midst of the unnamed and unincorporated wilderness, was to make a distinction without a difference, it seemed to me. (8)

この一節は、ソローのbioregionalism、すなわち、「人間の活動は政治的国境ではなく、生態学的・地理学的境界によって束縛されるべきであるとする考え方」を示すものとして重要である。<sup>12</sup> 1840年代、テキサスの併合問題や英米の共同領有地オレゴンの国境線問題が浮上するなかで、ソローは立場をこう表明する—「我々は今、政治的ではなく、自然の境界に関心があるのだ（We are concerned now, however, about natural, not political limits）」（66）。

ここまで見てくると、なるほどメキシコ戦争を念頭においた言葉を読みとることはできる。だが、ソローは国内外の情勢を度外視して、隠居人の振る舞いをしているようにも見える。『メインの森』には、少数派の振る舞いをするその態度以上に、メキシコ戦争にたいする眼差しを読みとることは不可能なのだろうか。やはり、投獄事件と“Ktaadn”には、時期的な偶然の一致以上のなにかがあるわけではないのか。

しかし作家が作品や論説を書くとき、意識的に素材や主題を選択し重複を避



けるよう努めるとしても、その内容が無意識の内に目下の関心事に収斂していくこともしばしばあるはずだ。その意味ではメキシコ戦争の前後、ソローはしきりに「制度」について考えている。『メインの森』において、*Contact! episode*に並んで問題視される次の箇所でも、ソローは「制度」を引き合いにして語っている。

This was what you might call a bran new country; the only roads were of Nature's making, and the few houses were camps. Here, then, one could no longer accuse institutions and society, but must front the true source of evil. (16 my emphasis)

ソローは、これまでの商業の侵入の記述を一切断ち切り、その場所を「まったく新しい国」と呼ぶ。「ここでは」とソローは言う、責めるべき「制度や社会」がなく、彼は「本当の悪の源泉に直面する。」しかし、「悪の源泉」とは何だろうか。Hoagは、これを「自然ではなく人間」、具体的には「木材業者、住人、狩人」と見なす(23)。しかしその見解は、「野人ソロー」というイメージに迎合しすぎだと言わねばならないだろう。なぜなら、ソローはここで、「制度」とは異なるなにかを見ているのであって、資本主義イデオロギーとしての「制度」に属する木材業者らを指すとは、到底考えられない。あるいは、Richard Bridgemanにとって、「この思わせぶりの前兆は、事実上、“Ktaadn”でも『メインの森』全体でも満たされることがない」(193)。<sup>13</sup> ただし、この「悪の源泉」が、直接的には過酷な自然であり、その広漠たる荒野を指すという点では意見の一致を見るはずだ。「悪の源泉」とは、まさに、*Contact! episode*の場面と直結するだろうからである。「Ktaadn」解釈が研究者のあいだで錯綜しているのは、おそらく、自然を「悪」と形容している点に、大部分起因している。たしかに「悪」という語に否定的な語感を読みとるのは、ひとまず妥当な解釈であるにちがいない。とすれば、*Contact! episode*をめぐる、ソローは死を意識させる崇高に価値を置いている、というわれわれの解釈をここで改めて検討しなおさねばならないのだろうか。

先の引用文で、「悪の源泉」の指示対象は不明確だが、比較対象として「制度」を挙げている点を見逃すことはできない。意味の浮遊する「悪の源泉」を唯一繋ぎとめているのが、「制度」という観念であるからだ。ソローは1846年7月24日前後の日記のなかで、人頭税の支払いを拒否する動機を次のように述

べている。ここでは、責められるべきは「制度」である。

In my short experience of human life I have found that the outward obstacles which stood in my way were not living men – but dead institutions (...) The only highway man I ever met was the state itself – When I have refused to pay tax which it demanded for that protection I did not want itself has robbed me – When I have asserted the freedom it declared it has imprisoned me.

I love mankind I hate the institutions of their forefathers – (*Journal* 2, 262)

忌避すべきは「生きた人間」ではなく、「死んだ制度」であり、州政府を「追いはぎ」(highway man) と呼ぶあたり、いかにもソローらしい言明である。この辛辣な政府批判がいわゆる「不服従」の原型であり、後に「市民政府への抵抗」へと実を結ぶ。「制度」を憎んで人を憎まず、それがソローの論法である。では、“Ktaadn”の「悪の源泉」とは何か。これまでほとんど引用されてこなかった次の日記の記述が、ソローの立場を端的に示すだろう。

Not thieves & highwaymen but Constables & judges-not sinners but priests-not the ignorant but pedants & pedagogues-not foreign foes but standing armies-not pirates but men of war. Not free malevolence-but organized benevolence. (*Journal* 2, 263)

このcatalogue的に羅列された名詞群において、but以下が「制度」を代表するものであろう。この二項対立こそがソローの思想を端的に示すものだが、特に後半部分、「常備軍」、「戦争好きの人間」、「組織化された善意」こそ、責められるべきもののなだ。では、比較されるために挙げられたと思われる、not以下の「外国の敵」、「海賊」、「自由な悪意」とは何に差し向けられているのだろうか。

ここでいう「自由な悪意」という言い回しこそが、“Ktaadn”の「悪の源泉」を説明するものではないだろうか。*Contact!* episodeの自然は、崇高でこそあれ、死を意識させるほどの過酷さであった。そこでは、「責められるべき制度」がなく、さらに言えば、描写しうる言語さえもが「死」への途上にあるかのご

とく、指示対象を失い、分節化が施されなくなっていた。ソローにとって、『メインの森』の自然は「野蛮で畏敬に満ちている、美しいけれども」(70)。木材業者や政治家のはびこる、安全だが醜い場所が、彼の言う「組織化した善意」なら、Ktaadnの光景は、野蛮だが美しい場所、つまりソローが日記で「自由な悪意」と呼んだものと対応すると言えるだろう。「自由な悪意」とは必要悪のことであり、政府や官吏による罪にとらわれない個人の良心のことである。

「市民政府への抵抗」において、ソローはメキシコ戦争への抗議を表明し、投獄された顛末を語る。一夜明け、伯母のMariaが税金支払を肩代わりし、官吏のSamuel Staplesがソローを釈放しようとしたとき、彼は「悪魔のごとく狂暴になって(“as mad as devil”」、釈放を拒んだという(Harding 204-5)。このことは、彼の「自由な悪意」の実践というべき行動である。その一箇月後、彼はメインの森で、「本当の悪の源泉」に直面する。荒野との「接触」と、不服従の実践に共通するもの—それは、「悪」なるものを逆説的に使用することである。メキシコ戦争の只中、ソローは、少数派が多数派に対峙するための理論的基礎を模索し、その根幹には「自由な悪意」が位置づけられると言ってもよい。いっぽう、『メインの森』で、ソローは荒野に向かって*Contact! Contact!*と本能的な叫びをぶつけ、「悪の源泉」への志向を強めていく。

### 3. 国境へのまなざし

では、そうした読みの結果、メキシコ戦争ひいては領土拡張政策下のアメリカにたいして、ソローはどうあるべきだと考えたのだろうか。メキシコ戦争に対する態度を『メインの森』から読みとることは可能なのか。それとも、これまで暗黙の了解とされてきたように、「市民政府への抵抗」と『メインの森』の両作品は、それぞれ政治論と自然論というように、棲み分けが施されているのだろうか。

歴史的背景を振り返れば、1846年から1848年の間は、James K. Polk大統領政権下にあたる(民主党、在任1845-49)。ポークは、着任早々、オレゴン領有を決め、テキサス、カリフォルニア、ニューメキシコの獲得へとむかう。メキシコ戦争の発端は、テキサスとメキシコの国境線をNuece川と主張するメキシコ側と、Rio grande川とするアメリカ側との対立である。ソローがメインの森へ向かったちょうど頃、Zachary Taylor将軍がリオ・グランデ河畔で大勝し、メキシコ領Californiaの主都Montereyを掌握する。その後の歴史は周知のとおり、

テキサス・メキシコ間の国境はリオ・グランデ川となり、それを契機にアメリカは西部の主要都市を次々に治め、国土から瞬く間にフロンティアが消失する。

では、ソローの国境へのまなざしはどのようなものなのか。メキシコ戦争下で書き上げた“Ktaadn”最終部近くに、注目すべき一節がある。

Have we even so much as discovered and settled the shores? Let a man travel on foot along the coast, from the Passamaquoddy to the Sabine, or to the Rio Bravo, or to wherever the end is now, if he is swift enough to overtake it, [...], when there are any, and tell me if it looks like a discovered and settled country, and not rather, for the most part, like a desolate island, and No-man's Land. (82)

この引用文は、この時点でのソローが領土拡張政策に並々ならぬ関心を示していたことを例証する。ここでいう「海岸」とは東海岸だけでなく、アメリカの針路を暗示させる。というのも、「PassamaquoddyからSabine、Rio Bravoに至るまで」という箇所を地図で辿ってみると、Passamaquoddyとは、メイン州とカナダNew Brunswick州との国境の地域であり、Sabine川はルイジアナ州西部とテキサス南部からメキシコ湾に流れ出る川である。特に注目すべきは、メキシコ戦争の発端となった地、現在のメキシコとの国境をなすRio Grande川への言及があり、それをソローが“the Rio Bravo”とメキシコ名で呼んでいる点である。

先述したように、ソローは地名にこだわり持つ作家であるから、その河川を“the Rio Bravo”と呼んでいることは、彼が国境線の成り行きに関心を持っていたことを示すうえで注目に値する。ただし、そのことをあげつらうだけで、メキシコ戦争への抗議を読みとれるというものではない。先の引用のなかで、「海岸線を歩いて旅せよ」とソローは言い、このように続ける—「そこがはたして、すでに発見され定住された国なのか、それとも大部分が荒廃した地域であり無人地帯なのか、私に教えてもらいたいものだ。」この一文はどのように理解すればいいのだろうか。この引用文の最終部における“No man's Land”は「無人地帯」という意味に加えて、敵味方の中間地帯という軍用の用法がある。ここでのソローは、Walden湖畔とメインの森の自然を対照させたのと同じように、New Englandとそれ以外の土地との対照を示すために、人間によって馴致された土地とそうでない地域を並列させたと考えることが可能だ。では、荒

廃した地域を馴致させる、言い換えれば近代欧米の論理に依る知でもって、自然物や先住民などあらゆるものを啓蒙する欲望がソローにはあったのか。

竹谷悦子氏が *Walden* 論のなかで例証したように、領土拡張政策下にソローが「未知の領域への憧憬のまなざし」があったことは事実だろう (272)。Emerson の〈透明な〉志向性が帝国主義的な側面をもつという、ある意味での危険思想が指摘されつつあるなかで、<sup>14</sup> ソローにもその矛先を向けた竹谷氏の指摘は検討するに値する—「メキシコへの侵略や奴隷制と不可分に結びついていたテキサス併合に対するそんなソローの異議申し立ては、『ウォールデン』の超絶主義的想像力のなかで (ソロー自身批判していたはずの) 拡張主義的国家像の「是認」へと橋渡しされていく」(271)。ここで指摘されている「超絶主義的想像力」とは先史を抹消し架空のフロンティアを創りあげる想像力のことである。実際のところ、ソローは *Walden* という作品から、美観にそぐわない先住民の姿や産業の影をテキストから隠蔽し、想像上の風景を作りあげている。

『メインの森』にかんしても、Lawrence Buell が指摘するように、「“Ktaadn”において削除と粉飾の身ぶり」をしており、そこでの風景はいわば改竄されているのであり、ソローは「一方で、〈アメリカすなわち自然〉、という還元を実行し、人間の歴史を跡形もなく過酷な内陸から取り去り、他方では崇高の言語を取り込むのである」(*EL* 71)。ソローは“Ktaadn”最終部において、Cabot、Gosnold、さらには Sir Walter Raleigh の名をあげて、原初のアメ리카大陸を想像してみせる。そして次のように続けている—「コロンブスがこの大陸を発見した最初の人であるならば、Americus Vesputius と Cabot と ピューリタン、その末裔たるわれわれは、ほんのアメリカの岸辺を発見したにすぎない」(81)。<sup>15</sup> たしかに、この引用部は、西海岸までを見はるかす、アメリカの「明白な運命」を裏づけるかのように解釈されうる。比喩的な解釈をするならば、*Contact!* episode における、自分の肉体と、外界との境界線が曖昧になる境地に、国境が揺れ動き外部と「接触」を続けるアメリカを、重ね合わせることもできるのだ。

以上のような議論には首肯すべき点があるとしても、しかし、そうした指摘がはたしてソローの思想をどこまで照射するかは疑問である。たしかにソローが、いってみれば超越主義的イデオロギーとでも呼ぶべきものの強い影響下で、文章を書いていたことはまず間違いはなく、領土拡張政策にたいして彼が両面感情を抱いていたことは事実だ。しかし、『メインの森』と〈市民的不服従〉

の思想との相互補完的な側面を考えてみると、そうした束縛／制度を振り切ろうと葛藤する作家の「震え」をこそ、われわれは読みとるべきであろう。人間性とは、想像上の欲望と実際の行為との配合の度合いで決定されると私は考える。だとすればソローの人間性とは、一方では東海岸に留まって踏査し続けながら、原初のアメリカを幻視し、また他方では投獄をもって抗議の意を示しながら、「遠い国を旅しているように」(RR, 62)、牢獄の意味を転覆させてしまう、実践と想像力とのねじれた配合で成り立っていると言えるのだ。

## 結論

ここまで、ソローの〈市民的不服従〉にまつわる日記と『メインの森』の両作品の間テキスト性に注目し、相互補完的な解釈の可能性を提示した。“Ktaadn”でソローが見たものは、死を意識させるほど過酷な荒野である。その崇高のあり様は、悪なる性質を帯びるものであったが、しかし、その野蛮性こそが、制度批判をするための〈市民的不服従〉の思想の礎となったことを検証してきた。『メインの森』は、メキシコ戦争で揺れ動く国境線への想像力によって生み出された。アメリカの国土と外部との境界線が引きなおされようとするとき、ソローは自分の肉体と自然物との境界に畏怖を感じとっていたのだ。

Waldenでおそらくもっとも引用される言葉、「私は地に足をつけて生きるために、生の本質的な事実だけに接するために、森に入った (I went to the walden because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life)」という一節の後半部に、「私が死にゆくとき、生きてこなかったと悟らないために (not, when I came to die, discover that I had not lived)」という句が続いている (90)。英米の批評家はほとんどこの句に注目しないが、ソローが森に入った理由を思うとき、自分が死ぬ直前の境地への配慮があったことは私には重要に思われる。彼が湖畔生活を中断し、“Ktaadn”で見たものは畏怖すべき死の光景であった。この初期作品の重要性は大きい。

“Ktaadn”と『メインの森』第二話、第三話とのあいだで、最も異なる点といえば、インディアンとの存在感である。残りの二つの語りで、ソローは生き活きとインディアンを描き出している。“Ktaadn”では、ガイドとして雇い入れたインディアンは途中でいなくなってしまうが、第二話の“Chesuncook”では、インディアン・ガイドのJoe Aitteonと、Neptune酋長の様子が多く描かれ、第三話“Allegash and East Branch”では、インディアンJoe Polisの描写が語りの根幹に

据えられている。とりわけ、このJoe Polisの人物描写は、Robert F. Sayreが言うように、「19世紀アメリカ文学において*Huckleberry Finn*のJimが、白人によるもっともリアリスティックな黒人像であるように、ソローが描くJoe Polisはもっとも魅力的なネイティヴアメリカンである」(Sayre 172)。

第二話は53年、第3話は57年の経験に基づいて描かれているが、それらも“Ktaadn”同様、歴史的背景との関連で論じられるべきだろう。ソローの二つの社会論文、「市民政府への抵抗」と「ジョン・ブラウンを擁護して」とのあいだの思想変節の問題に关しても同様である。<sup>16</sup> 領土拡張政策下のアメリカの歴史は、1846年のメキシコ戦争以降、「1850年の妥協」を経て、1859年のJohn BrownによるHarpers Ferry襲撃事件を見る。つまり、『メインの森』はこの期間の歴史を胚胎している可能性があるということだ。しかし、メキシコ戦争以降の時期を扱うのは、論稿を改めなければならない。おそらくそれは、ソローの人種に関わる問題、とりわけ彼のインディアン観を扱うことになるだろう。ソローは死線をさまよいながら、最期の二つの言葉—“Moose”、そして、“Indian”、とつぶやいて死んでいったという。<sup>17</sup> これらの言葉が『メインの森』後半部の主題を指していることは明らかだ。その意味でも、彼の死によって未完に終わった『メインの森』には、さらなる可能性が見いだせるはずだ。

## Notes

- 1 ソローの代表的エッセイ“Civil disobedience”は、現在刊行中のPrinceton版において“Resistance to Civil Government”というタイトルが冠されている。このタイトル変更はソロー自身の意思によるものとされているが、問題は少なくない。まず、前者の〈市民的不服従〉というタイトルのほうが人口に膾炙してきたこと、さらに、両者の内容に若干の違いがあり、とりわけ最終部の六行詩の有無の問題など、研究者のあいだでも意見の一致を見ていないのが現実だ。古参のソロー研究者Hardingなどは、新版でのタイトルが変更されていることを承知のうえで、あえて旧タイトルを採用しているが、多くの研究者は何の疑いも持たずに新タイトル名を採用している。しかし、テキストのauthenticityの問題に関わることであり、*Reform Papers*の編者も含めて、改めて議論されるべき重要な問題だろう。本論では、彼の思想を示すときには“Civil disobedience”の訳語、〈市民的不服従〉と表記し、特にエッセイの内容を示すときは“Resistance to the Civil Government”の訳語、「市民政府への抵抗」と表記することにする。
- 2 “Ktaadn”は1848年に*Union Magazine*誌に“Ktaadn, and The Maine Woods”との題目で公表されたのが初出である。
- 3 〈市民的不服従〉の思想に関しては、Michael Meyerが*Several more lives to live: Thoreau's Political Reputation in America*においてソローの非暴力思想と後世への影響を論じた研究所をはじめ、Richard Schneider, *Henry David Thoreau*を参照。投獄事件の顛末についてはWalter Harding, *The Days of Henry Thoreau*および高橋勤「ソローの牢獄」を参照。
- 4 Lyndon Shanley, *The Making of Walden, with Text of the First Version*. Robert Sattlemeyer. “The Remaking of Walden.” 伊藤詔子『『ウォールデン』生成過程とアメリカ社会』を参照。
- 5 Quaker教徒はGeorge Foxの「主の言葉に震える（‘tremble at the word of the Lord’）」との教えに従って神意が光臨すると震えだすというが、ここでのソローはまさにKtaadnの光景に打ち震えている。ソローがKtaadnを「ここは異教徒のための場所だ」（70-71）というとき、自然という宗教のQuakerとも言うべきソローの姿を私は想像する。この場面における多様な解釈のひとつの可能性として記しておきたい。
- 6 Hoagが参照したソローの“Sublimity.”を以下に引用する。Indeed terror is in all cases whatsoever, either more openly or latently, the ruling principle of the sublime.” Hence Obscurity, Solitude, Power, and the like, in so far as they are fitted to excite terror, are sources of the sublime. (*Early Essays* 93)
- 7 Scheneiderが参照したソローの“Sublimity”を以下に引用する。Whatever is grand, wonderful, or mysterious, may be a source of the sublime. Terror inevitably injures, and, if excessive, may entirely destroy its effect. (*Early Essays* 96)
- 8 ソローの“Sublimity”を以下に引用する。He (Edmund Burke) does not make death



the source of terror, but rather pain, using the word in its broadest sense. / Death itself is sublime. (*Early Essays* 93)

- 9 残りのもう1箇所は以下の通りである。...but let our houses first be lined with beauty, where they come in contact with our lives, like the tenement of the shellfish, and not overlaid with it (40). ここでcontactが名詞で用いられている。
- 10 インディアンにたいして、こうした先入観が見られるのは、「この時点では」ということを強調しておく必要がある。というのも、それ以降の語りでソローは同志のようにインディアンと交流し、自然物や異人種への眼差しというよりむしろ、一人の人間としてみている。ただしLucy Maddoxが指摘するように、人種観に関わる避けがたい固定観念がソローになかったとは言えないだろう。しかし『メインの森』のナラティヴ間での変化があるのは確かである。
- 11 超越主義者のなかで、抗議のため収監されたのはソローが初めてではなく、3年ほど遡ってBronson Alcottも同様の罪で収監されている (Harding 200)。
- 12 本文の定義は、研究社『リーダーズ・プラス』によるもの。Lawrence Buellは*Environmental Imagination*において、Timothy Dwightの*Greenfield Hill* (1794) をもって嚆矢とする“Literary Bioregionalism”の系譜を辿っている (405)。また、*Writing for an Endangered World*においては、Ecocriticismの重要なキーワードとしてこの語をより精緻に定義している (297)。このbioregionalismの考え方および19世紀中葉から盛んになり始める地政学と環境文学との関係は注目に値するだろう。
- 13 このBridgemanの評言を脱構築理論の言葉で言いなおすなら、指示対象の横滑りということになろう。Barbara Johnsonが、ソローの文体について、「濫喩—過剰使用の文彩」を帯びているとの指摘に呼応する (448)。
- 14 超越主義者たちの考え方が危険思想かどうかは改めて検討されねばならない。Emersonの帝国主義的側面を指摘したものとして笹田直人「まなざしの帝国主義」があるが、彼らの思想が危険思想だと断罪しているわけではない。
- 15 Cabotは1497年に北米東海岸に漂着した人物。GosnoldはJamestownへ最初の入植者を輸送した人物。Americus Vesputius (Amerigo Vespucci) はイタリアの商人・航海者。Americaの名称の由来とされる。Cabotは1497年に北米東海岸に漂着した人物。
- 16 ソローの〈市民的不服従〉の思想と、John Brownの蜂起を擁護する思想とのあいだに矛盾があることを問題化した研究に、伊藤詔子「アメリカ社会と『市民の不服従』の伝統」、Susan M. Lucas“Writing and Activism in the Work of Abbey and Thoreau”を参照。
- 17 William Channingの*Thoreau, the Poet-Naturalist* (336) および、Walter Hardingの*The Days of Henry Thoreau* (466) を参照。

## Works Cited

- Bridgman, Richard. *Dark Thoreau*. Lincoln : U of Nebraska P, 1982.
- Buel Lawrence. *The Environmental Imagination : Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Cambridge : Harvard U P, 1995.
- . *Writing for an Endangered World : Literature, Culture, and Environment in the U. S. and Beyond*. Cambridge : Belknap P of Harvard UP, 2001.
- Channing, William. *Thoreau, the Poet-Naturalist*. New York : Biblo & Tannen, 1902, 1966.
- Dean, B. P. Hoag, R. W. "Thoreau's Lectures Before Walden." Ed. Joel Myerson. *Studies in the American Renaissance*. Boston : Twayne, 1995.
- B. P. Dean. R. W. Hoag. "Thoreau's Lectures After Walden." Ed. Joel Myerson. *Studies in the American Renaissance*. Boston : Twayne, 1996.
- Emerson, Ralph Waldo, "Nature." *The Portable Emerson*. Ed. Bode, Carl. New York: Penguin, 1981. 7-50.
- Fresonk, Kris. *West of Emerson*. Berkley : U of California P, 2003.
- Harding, Walter. *The Days of Henry Thoreau*. Princeton: Princeton UP, 1992.
- Hoag, Ronald Wesley. "The Mark on the Wilderness: Thoreau's Contact with Ktaadn" *"Texas Studies in Literature and Language"* 24 (Spring 1982): 23-46.
- Johnson, Barbara. "A Hound, a Bay Horse, and a Turtle Dove: Obscurity in Walden." Ed. William Rossi. *Walden and Resistance to Civil Government*. New York : Norton, 1992. 444-50.
- Lucas, Susan M. "Writing and Activism in the Work of Abbey and Thoreau." Ed. Schneider, Richard J. *Thoreau's Sense of Place: Essays in American Environmental Writing*. Iowa : U of Iowa P, 2000. 266-79.
- Maddox, Lucy. *Removals : Nineteenth-Century American Literature and the Politics of Indian Affairs*. Oxford UP, 1991.
- Marshall, Ian. *Story Line : Exploring the Literature of the Appalachian Trail*. Charlottesville : UP of Virginia, 1998.
- Meyer, Michael. *Several more lives to live : Thoreau's Political Reputation in America*. Westport : Greenwood, 1977.
- Milder, Robert. *Reimagining Thoreau*. Cambridge : Cambridge UP, 1995.
- Paul, Sherman. *The Shores of America: Thoreau's Inward Explanation*. New York : Russel & Russel, 1971.
- Shanley, J. Lyndon. *The Making of Walden, with Text of the First Version*. Chicago : U of Chicago P, 1957.
- Sattlemeyer, Robert. "The Remaking of Walden." Ed. Barbour, James, and Tom Quirk.. *Writing the American Classics*. New York : U of North Carolina P, 1990. 53-78.
- Sayre, Robert F. *Thoreau and the American Indians*. Princeton : Princeton UP, 1977.

- Schneider, Richard J. *Henry David Thoreau*. Boston : Twayne, 1987.
- Thoreau, Henry David. *Early Essays and Miscellanies*. Ed. Moldenhauer, Joseph J, Moser, Edwin, Kern, Alexander C. Princeton : Princeton UP, 1975.
- . *The Maine Woods*. Ed. Moldenhauer, Joseph J. Princeton : Princeton UP, 1973.
- . *Reform Papers*. Ed. Glick, Wendell. Princeton : Princeton UP, 1973.
- . *Walden*. Ed. Shanley, Lyndon J. Princeton : Princeton UP, 1971.
- 伊藤詔子. 『よみがえるソロー：ネイチャーライティングとアメリカ社会』 東京：柏書房、1998.
- 笹田直人. 「まなざしの帝国主義」. スコット・スロビック、野田研一編『アメリカ文学の〈自然〉を読む』. 京都：ミネルヴァ書房、1996. 115-31.
- 高橋勤. 「ソローの牢獄—19世紀アメリカにおけるリベラリズムと文学」『言語文化論究』 No. 13. 九州大学大学院言語文化研究院、2001. 25-41.
- 竹谷悦子. 「1845年の7月4日—『ウォールデン』とテキサス併合」. 『英語青年』 第150巻 第5号. 研究社、2004. 270-72.

## **The Mexican War and *The Maine Woods*: On the Background of Thoreau's 'Civil Disobedience'**

In the summer of 1846, the year when the Mexican War broke out, Thoreau paid the first visit to the Maine woods soon after he was put in a jail for non-payment of his poll taxes. The purpose of this essay is to find out Thoreau's political and environmental thoughts based on both 'Civil Disobedience' and *The Maine Woods*. So far, little attention has been paid upon the relation of these works of Thoreau, so that it is worth while reading both of his works intertextually. In "Ktaadn," which is the first narrative of *The Maine Woods*, two prominent passages, "the *Contact!* episode" and "the true source of evil," have been much discussed among scholars and readers. These controversial texts might be interpreted in the contexts of Thoreau's political idea, say, 'Civil Disobedience' as well as of the American history of expansionism.

In "the *Contact!* episode", I will focus on "Sublimity" in the vast wilderness. It might be acknowledged that Thoreau felt somehow "sublime," assumed to be landscape of death. At this tableau, Thoreau depicts the landscape as something to make him aware of "awe" of his body. This experience should be also accumulated to his way of thinking. The passage of "the source of evil" could be understood as one of sublime-like experiences, though it is still arguable.

Furthermore, in order to fully understand the controversial passages in "Ktaadn," we should trace out the impacts of the Mexican War upon his works. Probably "the institution" could hold the key to our cross-reference reading. This is because Thoreau thought much of "institution" at this period, and wrote about it both in his *journal* referring to the Mexican War, and in *The Maine Woods*. Thus, our aim is to deeply understand his experience of "wilderness" in "Ktaadn," focusing on American history and Thoreau's literary carrier. The paper concludes with the significance of *The Maine Woods* from a historical point of view.